

## 本居宣長における神の概念

大久保 紀子

### はじめに

本居宣長（1730年—1801年）は江戸時代中期の国学者であり、神道学者である。宣長は、神道の聖典の一つである『古事記』に精密な注釈をほどこした『古事記傳』四十四巻を著した。宣長は『古事記』を読み解くことによって、日本古来の神道を明らかにしようとしたのである。宣長以前の神道は、主に儒教によって理論化と体系化をはかってきた。その典型が日本朱子学の構造と概念を転用して構成された垂加神道である。宣長はそうした神道を批判し、『古事記』に記された古来の神道に立ち返ることを説く。

垂加神道が依拠した日本朱子学では、理という形而上的な力が陰と陽の二気のはたらきによって世界を存立せしめると考えられている。人も社会も自然もすべて理を根拠として成り、理という一貫した原理によって説明され、方向づけられる。これに対して宣長は、人は存在や事象の意味、あるいは根拠を知ることではできな<sup>みしわざ</sup>し、世界を不可思議な、神の「あやし<sup>みしわざ</sup>き御所為<sup>御所為</sup>によるものとしてありのままに受け入れる道を選ぶ。神の御所為にすべてを任せ、ひたすら受動的に生きることこそ古来の「<sup>かむながら</sup>惟神」(1)の生き方であると考えるのである。

宣長の神道論は、これまでの研究が論定したような、古の『古事記』の世界を近世に虚構(2)として復活させようという企てでもなく、また、近世神道の特色である神道の倫理化(3)に全面的にさおさず思想でもない。宣長の神道論は『古事記』に記された神の御所為が現実の世界に実現していることを闡明し、『古事記』の神々の事跡こそ人の在り方の規準であることを示して人々に意識の転換を迫る宗教的な革新の思想なのである。

### 一 宣長の神道論の構造

宣長の神の概念は垂加神道を批判するところから生まれた。宣長が垂加神道のどのような点を批判したのかを知るために、日本朱子学の思想内容を簡単に説明しておく。先に述べたように、垂加神道の構造と諸概念は日本朱子学からの転用だからである。そうした上で、垂加神道と宣長の神道論を比較しながら、宣長の神道論の構造を明らかにしていく。

#### 1 日本朱子学の概要

日本朱子学では、理をあらゆる存在、事象の根拠である

とする。理という生生力によってこの世界は成り、理を規範としてこの世界のあらゆる営みがなされる。人の生も死も、昼夜の繰り返しも、四季のめぐりも、みな理という生生力の形而下におけるあらわれである。世界は本来、理が縦横無尽にその生生力を発現させる場としてある。理は無限の力を秘めて静謐を保っているが、ひとたび陰、陽二気のはたらきによってその力が発動されるや、その動きに五行（水、火、木、金、土）が連動し、翕聚と発散を限りなくくり返して天地に遍くゆきわたる運動となる。この運動が世界を存立せしめる。

人において、理という生生力は心身を活性化する力として内在すると考えられている。理によってこの世に在らしめられている以上、人の意味は内在する理本来の力を完全に発揮することにある。そのためには気質による偏向を正し、情意が未だ兆さない心の状態を保つことが必要であると考えられた。こうして心が原初の状態にかえった時、理は本来の力をあらわす。心身に理という生き活きた力が満ち、人は天地に遍くゆきわたる理と一体化して本来の在るべき姿を取り戻すのである。理を根拠として成り、すでに理を与えられている人にとって、理の力を完全に発現させて理そのものとなることは自然にして必然であり、人として当然の成りゆきであると考えられた。

#### 2 宣長の神道論の構造

垂加神道における神とは、日本朱子学の理、つまり形而上的な生生の力のことである。垂加神道では、『日本書紀』に記された神々を日本朱子学の構造にあてはめて、国常立尊とは理のことであり、続く神々は陰陽五行の生成をあらわしていると解釈する(4)。神々は理気論の隠喩なのである。

一方、宣長は、理や陰陽五行という概念を「無きことを、理を以て有げにいひなす」(5)「空理」(6)であるとして認めない。垂加神道のように、神々を理気論の隠喩として説明すると、神とは「たゞ仮に名を設けたる物にして、実は陰陽造化をさしていへる」(7)と理解され、「神代の事は、みな仮の作りことの如くにな」(8)らざるを得ない。結局、神々の実在を否定することになる。これに対して宣長は、「古事の実なる」(9)と述べて、『古事記』に記された神々のありさまをそのまま事実として読む。したがって、神を「実物」(10)であるとし、『古事記』に記された神々の御所為が事実としてあり、それが現在も有効にはたらいているからこそこの世が存立し、人の生活が成り立っていると考えるのである(11)。

宣長は「実物」としての神以外にも「<sup>みたま</sup>御霊」の神など多種多様な神を認めている(12)が、宣長の神の概念の特色を最もよくあらわしているのは、身体をそなえ、意志を持ち、主体として行為する「実物」の神々である。宣長によれば、

『古事記』や『日本書紀』に記された「実物」の神々の行為によってこの世界は成り、存続せしめられている。この世界は「高御産巢日神の御霊によりて」、「神祖伊邪那岐大神伊邪那美大神の始めたまひて」、「天照大御神の受たまひたもちたまひ、伝へ賜ふ」神の道(13)にしたがって成り、その神の道を天照大御神の子孫である代々の天皇がこの世に敷き行ってきた。これらの神々によって行われてきた道が有効にはたらいっているからこそ、人は衣食住を保証され守られてこの世に生きている。神の御所為はそういう形でこの世に実現していると宣長は考える。

宣長は、神の意味ではなく、神の存在と実質的なはたらきを説く。宣長は一貫して人が関知できるのは事実や「実物」だけであり、その背後にある意味や根拠についてはそれを神の領域に帰して、人は侵してはならないとする。「天地のことははしも、すべて神の御所為にして、いともいとも妙に奇しく、靈しき物にしあれば、さらに人のかぎりある智りもては、測りがたきわざなるを、いかでかよくきはめつくして知ることのあらむ」(14)と述べるとおりである。

宣長のように、人は「実物」や事実の背後にある意味や根拠はわからないとするならば、人は主体性や自律性を持ち得ず、眼前の事象のあるがままを受け入れていく受動的な在り方しかできないということになる。一般に、人は存在や事象に対して合理的と思われる意味づけをし、それに基づいて価値判断を下したり、秩序立てたりすることによって主体的にかかわっていく。しかし、意味や根拠を知ることができずとすれば、世界は限りなく不可思議な世界となり、積極的に意味づけしたり方向づけたりすることはできない。「あやし」く不可思議な状態のまま受け入れていくよりほかないということになる。

また、宣長において神は「実物」であるということから次のようなことが導き出される。垂加神道では神は形而上的な力であり、宣長においては「実物」であるという対照は、構造的には次のような相違となつてあらわれる。垂加神道は、神という形而上的な力が陰陽五行の生成という段階を経て人の生に具体化し、さらに人においては、神という力が心身を活性化して人のあるべき姿に結実するという重層的な構造になっている。意味もしくは根拠である理という力が形となるためには、形而上と形而下にわたり、かつ人の心身を介した重層的な構造が必要なのである。

それに対して、宣長の「実物」の世界は事実もしくは具体的な行為だけの単一にして平板な世界である。この世界の在り方は『古事記』に事実として示され、人は『古事記』に記された神の行為をそのまま模倣するという単純な構造となっている。構造としては単純であるが、その意味する

ところは複雑である。なぜならば、宣長の世界が単一にして平板なのは、現実の世界が神の世界の一部とびったりと重なっているということだからである。宣長は、現実の世界に神の「あやし」き御所為を見、世界はすべて神の御所為によるとする。現実の人の世界は「あやし」き神の世界と重なっており、神の世界は人の世界の外延にさらに水平にひろがって、人の関知し得ない領域を形成している。

神が力ではなく「実物」であることによって、人の在り方も変化せざるを得ない。垂加神道では、人は神という力の運動の中にあり、その力と一体化することによって人のあるべき姿が獲得されると考えられていた。そのために心の偏向を正すことが必要とされた。

しかし、宣長において神は「実物」であるから、人と神が一体化するという関係は成立し得ない。また、人が関知できる範囲を「実物」の世界に限る以上、神との関係も人間同士の関係から演繹され、人間関係に準じて構築されるほかない。その結果、宣長は『古事記』に記された人としての神の御所為や心の在り方を手本とし、それを模倣することを説く。模倣とは、内面的な変革をはかるのではなく外面をなぞることである。宣長は、神々の心の在り方を我が心に実現しようとする場合でさえ、古典の文章や歌をてがかりとして、その心の在り方を徹底してまねる方法をとる。

内面的な変革ではなく模倣を主張する理由は二つある。一つは、宣長にとって、心とは限りなく「あやし」きものであり、智慧や意志によって統制できるものとは考えられなかったからである。宣長は意志や主体性を捨て去って、神の御所為や心の在り方を模倣することが人の在るべき姿であると考えているのである。

模倣を主張するもう一つの理由は、宣長は人は神々の心の在り方を實現する素地をすでに与えられていると考えるからである。心の在り方を厳しい修養によって新しく獲得するのではなく、神によって生まれつき与えられている本来の心（「真心」）を、模倣した形に沿ってありのままに表現しさえすればよいと宣長は考える。宣長によれば、「人はみな、産巢日神の御霊によりて、生まれつるまにまに、身にあるべきかぎりの行は、おのづから知りてよく為る物」(15)であった。修養によって心のなかみを修正するのではなく、心の素地を純粋なままにあらわすことが求められているのである。

宣長において垂加神道を批判するとは、世界を人の智慧によって意味づけたり、秩序立てたり、説明したりすることを放棄するということであった。宣長は、存在や事象の意味、根拠を空理によって作り上げ、そこから原則や規範を導き出して、世界を秩序づけ統制しようとするのではな

く、世界を神の御所為によるものとして「妙に奇しく、靈しき」(16)ままに受け入れることを選ぶ。宣長の思想は、人の理性が指し示す合理性や秩序、規範を基礎とするのではなく、理性を超えた不可思議な神の「あやし」さを基礎として成立しているのである。そして、宣長が世界を不可思議なままに受け入れることができたのは、この世界が神の御所為による世界であり、神のはたらきがこの世にすでに実現していることを確信していたからである。

では、神の御所為による「あやし」き世界とは具体的にどのような世界なのであろうか。また、宣長は神のはたらきがこの世界にすでに実現していることを確信して「あやし」き世界をそのまま受け入れるが、どのような根拠によって神のはたらきがすでにこの世に実現していると考えるのであろうか。さらに、「あやし」き世界において人の在るべき姿はどのように考えられているのであろうか。

## 二 「あやし」き世界、「あやし」き心

垂加神道が理によって世界を合理的に説明し尽くし、すべての存在、事象は理によって示される姿を目指すべきであると考えのに対して、宣長がとらえた世界は、限りなく「あやし」く測り知れない世界であった。宣長はこの世界を「あやし」き神の御所為による世界であるとし、その「あやし」さを人智によって説明したり、統制したりすることを拒否して「あやし」きままに受け入れる。

### 1 「あやし」き世界

宣長は次のように世界を「あやし」きものとしてとらえる。

又人の此身のうへをも思ひみよ、目に物を見、耳に物をきき、口に物をいひ、足にてあるき、手にて萬のわざをするたぐひも、皆あやしく、或いは鳥蟲の空を飛び草木の花さき実のるなども、みなあやし、又無心の物の有心の鳥蟲などに化するたぐひ、狐狸のかりに人の形に化するたぐひなどは、あやしきが中のあやしき也、されば此天地も萬物も、いひもてゆけば、ことごとくあやし奇異あやしからずといふことなく、こゝに至りては、かの聖人といへ共、その然る所以の理は、いかに共窮め知ことあたはず、是をもて、人の智は限りありて小きことをさとるべく、又神の御しわざの、限なく妙なる物なる事をもさとるべし

(『くず花』全8、129頁)

世界をあらためて虚心にながめて見れば、人の五感のはたらき、身体の動き、また鳥虫、草木のさまに至るまで「ことごとく奇異から」ざるものはない。人は人智の限界を自覚し、あやしさの中に神の「限なく妙なる」「御しわざ」を認めるべきであると宣長はいう。

「あやし」とは、存在や事象の背後にある根拠や原則、因果関係などが全くわからないということである。ある事象が、どのような理由でどのような作用によってそうになっているのかわからない場合、人は安易に、自分の狭い智慧の範囲内で合理的に説明しようとしがちである。しかし、宣長は、人はそのあさはかな智慧をもって「あやし」き領域を侵してはならないと主張する。「あやし」き領域とは神の領域だからである。

宣長は、「限なく妙なる」神の御所為が世界にはたらいっていることを見、あやしさをそのまま受け入れる道を選ぶ。存在や事象の背後にある根拠や意味をさかしらな智慧で説明することによって世界をわが掌中におさめたいという欲望を抑えて、また、人間の規準によって世界を秩序づけようという思い上がりを絶って、宣長は「あやし」さをありのままに受け入れるのである。

### 2 「あやし」き心

宣長は、ほかならぬ自分の心にも「あやし」さを見出し、次のようにいう。

わか心なからわか心にもまかせぬ物にて、悪しく邪なる事にて感ずる事ある也、是は悪しき事なれば感ずまじとは思ひても、自然としのひぬ所より感ずる也

(『紫文要領』全4、58頁)

人の心は、善悪の規準によって統制され得るようなものではない。「自然としのひぬ所より感」じて「わか心にもまかせぬ」うごきをする。こうした心の「あやし」い、不可思議な動きこそ神の御所為そのものであり、人は「自然としのひぬ所より感ずる」心をそのまま受け入れるべきであると宣長は考える。たとえその結果、心がいかに不可思議な無秩序なうごきをなそうとも、その「あやし」きこそ神の御所為がはたらいっているあかしである。宣長は、心の動きを、人間が作り出した規準によって価値づけしたり統制したりせず、本来のありのままの状態を受け入れる。そうすることが、神の御所為をそのままあらわすことになるからである。「あやし」くうごき心、それが神の定めた、人の心の状態であった。後述するように、宣長は、こうした心の本来の在り方を『古事記』(17)に記された神々の御所為の中に見る。

### 三 「あやし」き世界を受け入れる根拠—神のはたらきが実現していることの確信

宣長が「あやし」き世界を受け入れることができたのは、神のはたらきがすでにこの世界に実現していることを確信していたからである。宣長はその根拠を『古事記』に見出す。宣長にとって『古事記』は遠い遙か昔の神話ではなく、現在と一続きにつながる事実の世界であった。宣長は、『古事記』に記された事柄を事実として読み、『古事記』に記さ

れた神の御所為が現在も実質的な作用を及ぼして人の日常生活を支えていると考える。宣長は、現実の世界を『古事記』に記された神の御所為が実現していく世界と見るのである。

### 1 『古事記』を事実として読む

宣長は、記紀に記された鏡が五十鈴宮に、劍は熱田神宮に残り、また神代の遺跡、山陵が各地に残っていること、また神代の遺事が朝廷の行事として受け継がれ、神代の職を伝えている氏族が現存していることを根拠として、『古事記』の内容を事実であるとする(18)。正確にいえば、宣長にとって『古事記』の内容は単なる事実ではなく、現実の生活の成否にかかわる事実であった。宣長は、『古事記』は「たゞはるけき世界の、むかしかたりをきくがごと、よそげにのみ思ひ過」(19)すべきことではなく、「皆今のよの中、おのが身々のうへにかゝれる、本なること」(20)であると述べる。『古事記』の内容は現実の生活と一続きにつながって、今ここに生きるわが身の成否を左右していると宣長は考える。それが最もよくあらわれているのが天照大御神についての解釈である。

### 2 『古事記』の事実がこの世界に実現している

宣長は、『古事記』の内容が事実であることを示す根拠として、『古事記』に、太陽でありまた天皇の祖であると記されている天照大御神が今も太陽としてこの世を照らし続けているという事実をあげる。そして、天照大御神が太陽としてこの世を照らし、天照大御神が下した「あまつひつぎは寶祚之あめつちのむたときはかきはにさかえまさむ隆盛當與天壤無窮者矣」(21)という勅令が「道の根元大本」(22)として、今も確かに有効にはたらいているからこそ世界の安定が保たれ、衣食住が保証され、日々の生活をとどこおりに営むことができると考えるのである。今日このように生きていられることそれ自体が記紀の記述が事実であることの証しなのである。

見方をかえて言えば、記紀に記された「みましらすむくになり寶祚之隆盛當與天壤無窮者矣」という勅令、あるいは「汝將知国」と「ことよしたまふ言依賜」(23)言葉が、今、人の生活に実現しているということになる。『古事記』に記されたことを事実として読むということは、『古事記』の神々の言葉や御所為が、現実の世界で実現しているということにつながっていくのである。宣長が『古事記』から読みとった、「よごとまがこと吉善凶悪事もほらよごと かへぎつぎに移りもてゆ」(24)き「全吉善に復」(25)の神代の理も、歴史の中に実現する事実なのである。宣長にとって、この世界は記紀に記された神の御所為が次々に実現していく世界なのである。

しかし、一般に宣長のように『古事記』に記されていることを事実として受け入れ、それが現実の世界に実現していると考えすることは非常に難しい。特に『古事記』の神話

的な部分や、天照大御神が人体にして太陽であるというとりえ方を受け入れるには抵抗がある。宣長は、なぜこうした『古事記』の記述を事実として読むことができたのであろうか。

### 3 『古事記』を事実として読むことはいかにして可能であったか

宣長が『古事記』を事実として読み得た理由の一つとして、宣長の特別な言語感覚をあげることができる。宣長は、『古事記』について、次のような歌を残している。「ふること古事ふみ記をら読めば古の手ぶり言問ひ聞き見る如し」(26)。『古事記』を読めば、古の人々あるいは神々の一挙一投足が手にとるように見え、また、言問う声が耳に聞こえるようであると宣長は言う。宣長は、『古事記』の言葉を介して、眼前にありありと古の人々の動作を見、声を耳にとらえることができた。宣長にとって『古事記』の言葉は実体なのである。『古事記』に記された神々が「実物」でしかあり得ない所以である。

加えて、宣長は人のさかしらな智恵や判断、世間に通用している原則や規準から自由であった。宣長は人の世界の規準ではなく、「あやしき神の世界の規準に拠るのである」(27)。こうした感覚と態度によって、宣長は『古事記』を事実として読み、この世界を神の御所為が実現していく世界ととらえることができた。現実の世界を神の御所為が実現していく世界であると認識することは、人智の限界をわきまえ、世界を人為による原則や規準によって統制したり方向づけたりせず、ありのままに受け入れていくことと同意なのである。

## 四 「あやしき世界における人の在るべき姿

「あやしき世界における人の在り方の根拠もまた『古事記』に求められる。宣長は、『古事記』の神々のありのままに反応し、ありのままにうごく心こそ人間本来の心であるとして「真心」とよぶ。事象に対して素直におおらかにうごく「真心」は神々の心ばえとして価値づけられ、宣長がみずからの心のうちに見出した「あやしき」さも「真心」であるがゆえの反応として正当化される。神代の「真心」を今に伝える古典や歌を学ぶことによって、失った「真心」を再び形成し得た時、人は「あやしき神の御所為による世界を「あやしき」ままに受け入れることができると考えられた。

### 1 「真心」

『古事記』の神々はあるのままの感情をあらわにする。たとえば伊邪那岐大御神は、妻である伊邪那美神の死を悲しんで、「ひたすら小児のごとくに、泣き悲みこがれ」る。これこそ人の「真実の性情」(28)、すなわち「真心」であり、

人は本来かくあるべきであると宣長は考える。しかし、死を本来の悲しみのままに悲しむということは非常に難しいことである。たとえば、死を空理空論によって説明し納得したつもりになって、悲しむべきものではないとしたり、世間体をはばかりて悲しみ乱れる心を抑制したりするのが人間である。さかしらな智恵にさえぎられて人はありのままの心を失っている。「真心」はそうした人間の智恵や規準を払拭したところに再び形成される。「真心」は人間の本性のままに悲しいことには悲しく、うれしいことにはうれしく素直に反応しうごく「直」さ(29)と賢げな判断や統制の対極にある「おほとかにやはらびたる」(30)在り方によって構成される。

## 2 歌によって「真心」を再形成する

宣長は、『古事記』や『日本書紀』、『源氏物語』、『万葉集』などの和歌集を学ぶことによって「真心」を再び形成することができる。これらの日本の古典には、たとえば、「花見るときの心はかやうの物。月見る心はかやうの物。春のこころはかやうかやう秋の心はかやうかやう、郭公をきゝたる心はかやうの物。恋するときの思ひはかやうかやうの物、あはぬつらさはかやうの物。あふうれしさはかやうの心」(31)という、神代からの人のありのままの心の在り方が記されている。宣長は、それを行住坐臥くり返して読み、心に反芻して模倣することによって「真心」を我が心を実現することができる。それは心を統制することではない。「あやし」くうごく心を「あやし」さの本源である神の心ばえとして位置づけ、本来の「あやし」き心のうごきをとりもどすことなのである。

古典や和歌集に神代の心ばえが伝えられていることを認めたとしても、なぜ、その文章や歌をまねることによって「真心」を再形成することができるのであろうか。三の3で述べた宣長の言語感覚がここに再びあらわれる。宣長にとって、古典の言葉、特に歌は「久しきよゝをへだてても、語りつぎかきもつたへて見る時は、まちかくそのおりの有様を見きくが如く、その人にあふこゝちして、すゞろに泪のおつる」(32)ほどの実在感をもつものであった。その言葉に「すがりて」(33)、「真心」を自己の内に再び形成していくのである。

## 3 徹底した受動性

古典を学ぶことによって本来の「真心」が形成されると、それまで何とも感じられなかったさまざまな事象に心が反応しうごくようになる(34)。「あやし」きものは「あやし」いままに、美しいものは美しいいままに、悲しいことは悲しいいままに心に響く。神の御所為による世界を前にして、神の定めたままに反応し受け入れる心がここに実現する。宣長は、その状態を次のように述べている。

霞と共に春たちかへるあしたより、雪のうちに年の暮れゆくゆふべ迄、物ごとに何かはあはれならざらん。あたら花鳥の色もねをも、いたづらに見きゝすぐて、ひと言の<sup>ながめ</sup>詠もなくむなしくあかしくらはんは、いみじういふかひなく口おしき事なりかし。おりふしごとにあはれにもおかしくもうち覚えむ事にふれて、よくもあしくも一言つゞりいでて、おもふ心をのべたらんは、うき世のおもひ出なにかはこれにまさらん。

『石上私叔言』全2、173頁

再び形成された「真心」に世界が新しく映る。霞立つ春の朝も雪の夕暮れも、花の色も鳥の声もみな「あはれ」をもよおすものとして心に響き、神代にそうであったままに心がうごく。宣長はその状態に最高の評価を与えて、その心のうごきを歌に詠むこともせず「いたづらに見きゝすぐ」すことは、「いみじういふかひなく口おしき」ことであると述べる。神の御所為による「あやし」き世界をながめ、神代の心ばえのままに心がうごく。それは、かぎりなく受動的で何の作用も効果ももたらさない。しかし、受動性を徹底することによってはじめて人は神の御所為を感覚することができる。神の御所為による世界を、ただ無心にながめ心が我知らずうごく時、人は神の世界の中にいるのである。その心のうごきを歌に詠めば、それはこの上ない「うき世のおもひ出」となる。そしてその歌は、神代の心ばえという価値の実現であるがゆえに、人の限りある命を超えて「萬世くちぬわざ」(35)として残るのである。

## おわりに

以上、述べてきたことから、宣長の神道論が『古事記』の世界を近世に虚構として復活させようという企てでもなく、神道の倫理化に全面的にさおさす思想でもないことが明らかになった。宣長において神は虚構ではなく、現実の世界にそのはたらきを実現する実質的な存在であった。また宣長の神道論は「あやし」さに基礎を置き、神代に規準を置く点において倫理化とは異なる方向を目指している。宣長は、『古事記』に立ち返ることによって、神の御所為による世界とその中で生きる人の新しい在り方を明らかにしたのである。

- 引用は『本居宣長全集』(筑摩書房、1968年—1987年)によった。例えば、全集第一巻から引用した場合は「全1」と記した。また、便宜上、表記を改めた部分がある。

注

- (1) 神の道にしたがうということ。
- (2) 百川敬仁「露出する虚構」(百川敬仁『内なる宣長』(東京大学出版会、1987年)所収)、31頁以下。
- (3) 近世神道の倫理化の一般的な傾向については、高島元洋『山崎闇齋』(ぺりかん社、1992年)、572頁以下。
- (4) 図示すると次のようになる。(高島元洋『山崎闇齋』(ぺりかん社、1992年)、497頁を参考にした。)

根元の神

国常立尊一理 (以下の六代を包括する)

陰陽五行の生生

くにさつちのみこと  
 国狭槌尊一水  
 とよくむねのみこと  
 豊斟淳尊一火  
 うひちのみこと すひちのみこと  
 泥土煮尊・沙土煮尊一木  
 おほとのちのみこと おほとまべのみこと  
 大戸之道尊・大苦辺尊一金  
 おもだるのみこと かしこねのみこと  
 面足尊・惶根尊一土

人の生生

いざなぎのみこと いざなみのみこと  
 伊弉諾尊一陽 伊弉册尊一陰

- (5) 『くず花』全8、173頁。
- (6) 同右。
- (7) 『古事記傳』一之卷、全9、10頁。
- (8) 同右。
- (9) 『くず花』全8、126頁。
- (10) 『答問録』全1、533頁。
- (11) 「上は位たかく、一国一郡もしりて、多くの人をしたがへ、世の人にうやまはれ、萬ゆたかにたのしくしてすぐし、下はうえず食ひ、さむからず着、やすくをる。これらみな、君のめぐみ、先祖のめぐみ、父母のめぐみなることはさるものにて、その本をたづぬれば、件の事どもよりはじめ、世にありとあるもろもろのこと、みな神のみたまにあらずといふことなし」(『玉勝間』全1、p. 447)。
- (12) 『古事記傳』三之卷、全9、125頁。
- (13) 以上『直毘靈』全9、57頁。
- (14) 『直毘靈』全9、52頁。
- (15) 『直毘靈』全9、59頁。
- (16) 『直毘靈』全9、52頁。
- (17) 宣長の神道論は主に『古事記』の記述に立脚しているが、『日本書紀』の記述を援用する場合もある。後述する「寶祚之隆盛當與天壤無窮者矣」などがその例である。その場合には、記紀においてと明記することとする。
- (18) 『くず花』全8、126頁。
- (19) 『玉勝間』全1、295頁。
- (20) 同右。
- (21) みずからの子孫である天皇の永遠なる統治を保証する言葉。(坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋『日本書

- 紀 上』(岩波書店、1967年)、147頁)。
- (22) 『玉くしげ』全8、310頁。
- (23) 天孫に日本を領有し支配することを委任する言葉(『古事記傳』十五之卷、全10、141頁)。
- (24) 『古事記傳』七之卷、全9、294頁。
- (25) 同右、295頁。
- (26) 『自選歌』全18、278頁。
- (27) 「人は人事<sup>ひとのうえ</sup>を以て神代を議るを、我は神代を以て人事を知れり」(『古事記傳』七之卷、全9、294頁)。
- (28) 以上『玉くしげ』全8、316頁。
- (29) 『石上私淑言』全2、155頁。
- (30) 『石上私淑言』全2、156頁。
- (31) 『紫文要領』全4、110頁。
- (32) 『石上私淑言』全4、173頁。
- (33) 『あしわけをぶね』全2、33頁。
- (34) この状態がすなわち「物のあはれをしる」状態である(『石上私淑言』全2、100頁)。
- (35) 『石上私淑言』全2、173頁。